The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウェブログの計量的文体研究
Author(s)	岸本, 千秋
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69702
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　岸本　千秋　）	
論文題名	ウェブログの計量的文体研究

論文内容の要旨

本研究は、計量的手法を用いて、表記・表現、書き手の意識の各観点から、分析、考察を行い、ウェブログ（以下、ブログ）の文体をとらえることを目的とする。ブログには、従来の、一般的な書きことばとは異なる特殊な記号類の使用が散見され、それがブログの大きな特徴の一つとなっている。それらを、ウェブ記号（カッコ付き文字・フェイスマーク・絵記号）と名付けた。ウェブ記号は、記号のみで出現することはほぼないにもかかわらず、これまでは、文と記号類との出現関係について論じられてこなかった。本研究では、従来、扱われなかった、ウェブ記号と文、ウェブ記号とことばとの関係に注目し、記号類の出現傾向を明らかにする点において意義が存在する。

本論文は「はじめに」「おわりに」のほか、第1章～7章によってなる。

第１章では、「計量文体論」について、これまでの研究の流れと方法論について確認し、おもな研究内容について概要を説明した。次に、ブログの社会的背景について説明を行った。公的な資料から得られたデータと、メディアによって取り上げられた内容とを紹介しながら示したものである。ブログが、一般の人々の生活の中においては新しいコミュニケーションの手段としての側面をもちながら、一個人が情報の発信者となれる点において一気に認知度を上げてきたことを示した。そして、それに伴って、社会の中で取り上げられることが増え、それがさらに社会に浸透していくという流れを確認した。この社会的な現象は、個人から発信される言語情報量が爆発的に増えることにもつながり、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）のデータの一部として利用されることとなったことを示した。ブログに関する先行研究については、社会学・社会心理学・行動心理学の分野と、日本語学・言語学の分野とについて網羅することを目指した。日本語学では、ブログ研究とケータイメール研究とについて確認した。特に、本研究で扱ったウェブ記号については、ケータイメール研究において、絵記号類として各種の分類・整理が行われ、それらの役割や機能については、一定の成果が蓄積されていることを示した。ただし、これらメディアに用いられる記号の類は、記号のみで出現することはほとんどないにもかかわらず、記号と文、記号とことばとの共起関係についての論考は見当たらないことを指摘した。

第2章は、調査資料についての概要説明である。データを収集したブログのサイトについて、登録者数、年代、データの収集方法などの詳細を示した。

第3章では、ウェブ記号について概観し、その中でも、「カッコ付き文字」についての分類・整理を主として行った。「カッコ付き文字」には、「感情表現」「状況説明」の用例が多数あることから、まず、これらについて解説を施し、下位分類として「形式面」と「表現スタイル」に大別した。さらに、「形式面」については、「漢字１文字」「オノマトペ」「感情を直接表現」「有名人を引用」に4分類し、「表現スタイル」については、「言い訳・弁解」「誇張」「ツッコミ」の3分類とし、それぞれについて用例を示し説明を加えた。以上によって、ブログで用いられる「カッコ付き文字」は、ケータイメールなど他のメディアでの使用とは異なる側面をもつことを示した。

第4章では、ブログに見られる「読み手意識表現」について分類し、各項目の考察とアンケート調査による書き手の公開意識とをとらえることを目指した。「読み手意識表現」とは、ブログに現れる「不特定多数の読み手を意識した表現」である。アンケート調査で有効回答とした書き手のブログを調査対象データとし、そこから「読み手意識表現」を取り出し、大分類4項目、小分類13項目に分類した。これらのうち、使用頻度の高い6項目として、「丁寧体」「終助詞（ヨ・ネ）」「ウェブ記号」「追加説明」「自称詞」「メタ言語」について考察を行った。また、「読み手意識表現」の各項目どうしが一文の中でどれほど共起するのかについて確かめた結果、自称詞が他の「読み手意識表現」ともっとも共起する傾向にあることを示した。アンケート調査では、書き手の「公開意識」に焦点を当て、公開に積極的なグループとそうでないグループとがあることを示し、それぞれの「読み手意識表現」の出現率について確認した。その結果、いずれのグループも「丁寧体」がもっとも使われていることを示した。公開に関する意識の違いでは、

公開に積極的なグループで「読み手意識表現」がより多く使用されていることを明らかにし、書き手の意識と表現とに関連が認められることを確認した。

第5章では、ブログの文章の量的構造を示した。形態素解析を行い、品詞、語種、文長、字種について調査結果を示した。その際、一般的な書きことばと比較をするために、新聞の投書欄と比較した。品詞比率については、国立国語研究所（1955『談話語の実態』）の話し言葉データも併記した。字種については、記号を取り上げ、一般的な書きことばに用いられる記号・符号（「従来型記号」とした）と、ウェブ記号との出現比率を新聞の投書欄と比較し、読点と区切りの括弧類以外は、ウェブ記号の方に特に多く出現することを示した。また、樺島（1954「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」）から導き出された「樺島の法則」に、ブログのデータを当てはめた結果、「小説地の文」よりも名詞の値が小さくなり「談話語」との間に位置することを示した。以上の各調査結果のすべてにおいて、ブログの文体が、書きことばよりも話しことばに近い文体であることを確認した。

第6章と第7章とは、ブログの文とウェブ記号との関係について考察を行った。ウェブ記号が直前の文とどのようにかかわるのかという観点からの分析である。分析の方法としては、文を、ウェブ記号が付加された文（以下、ウェブ記号アリ）と、ウェブ記号が付加されていない文（以下、ウェブ記号ナシ）とに分け、それらを比較することによって、文とウェブ記号との共起関係にどのような傾向があるのかをとらえようとした。

第6章では2つの調査を行った。1つは、文長（文字数）を調査の基準とした分析で、もう1つは文の品詞構成の比率を基準とした分析である。ウェブ記号アリはウェブ記号ナシよりも平均しておよそ4字少なく、この差はｔ検定によって有意差が認められた。また、品詞構成比率ではロジット変換後の値によって、感動詞、形容動詞、副詞（[男]のみ）は、ウェブ記号アリに多く用いられ、反対に、接続詞、名詞、連体詞については、ウェブ記号アリには用いられにくい傾向にあることが認められた。これらの結果から、「書き手の感情を勢いよく述べるため」の「文長が短くて、感動詞、形容動詞、副詞に相当する語が多い文」にはウェブ記号が付加されやすいと結論づけた。

第7章では、文末表現とウェブ記号との関係について考察を行った。ここでは、ウェブ記号の出現位置が文末に多いことから、ウェブ記号が書き手のモダリティに関わる可能性があるととらえ、文末表現を中心に、2つの視点からウェブ記号の共起関係を調査した。1つは終助詞とウェブ記号との共起関係であり、1つは言いさし文の終結部である接続助詞とウェブ記号との共起関係についてである。どちらも、ウェブ記号アリとウェブ記号ナシそれぞれについて、対数尤度比検定を用いて共起関係を調べた。その結果、終助詞については、終助詞「ナ」が用いられた文の場合、他の終助詞よりもウェブ記号と共起する強度が大きいことが確認された。これは、終助詞「ナ」が「感動」や「願望」の気持ちを表す時に用いられることと関係し、そのような文意の場合には、ウェブ記号が付加されやすいのだとした。また、「ナ」の変形である「ナア」については、「独話や心内発話」において現れやすいが、聞き手や読み手の存在を意識した場合にも用いられることがあり、そのような場合にもウェブ記号が付加しやすいことを指摘した。さらに、第6章で明らかにした、感動詞、形容動詞、副詞についてはウェブ記号ナシとの違いが大きいという結果と矛盾しないことも述べた。これは、感動詞、形容動詞、副詞などが成分となった「動的」な文に「感動」などの気持ちを表す「ナ」が文末に付加することが予想されるためである。終助詞「カ」は、ウェブ記号ナシの文に有意に多く用いられているが、これについては、疑問を表す文には疑問符「？」が付く場合があり、そのような時には、あえてウェブ記号を重ねて用いることがないのだろうとの考えを示した。また、終助詞「ネ」は、ウェブ記号アリ、ウェブ記号ナシいずれの文にも有意差が認められなかったが、終助詞の中で出現頻度が最も高く分析に値するものとして取り上げた。ここでは、先行研究で明らかになった「ネ」と視線行動との関係に関連付けて考察を行った。ブログは読み手を意識はしているが、読み手が眼前に存在しないために、そこで用いられる「ネ」の用法は、結果として＜自己確認＞がほとんどであることを示し、ウェブ記号も、「ネ」と同じく＜自己確認＞の機能をもつ可能性があるとした。次に、言いさし文の終結部である接続助詞について分析・考察を行った。対数尤度比検定の結果、「ケド」と「ノデ」に有意差が認められ、「ケド」は出現した接続助詞の中で、もっとも強くウェブ記号アリと共起する傾向にあることを明らかにした。ブログでは、ケド節で前言の内容を訂正したり補正したりする場合にウェブ記号が共起しやすくなるということである。これについては、前言だけをストレートに強く述べることがはばかられる場合、ケド節には緩衝機能があることを示し、ウェブ記号はその緩衝機能を引き継ぎ、ケド節と共に緩衝機能を担っているためだと分析した。理由・原因を表す「ノデ」も、「ケド」に次いでウェブ記号と共起しやすい傾向にある。「ノデ」を用いると「言い訳」に聞こえる場合があるという観点から、ウェブ記号との共起関係について考察を行った。言い訳には潔くないというイメージがあったり、言い訳をしたことに対して後ろめたさを感じたりする場合がある。そのようなイメージや感情を、ウェブ記号を付加することで緩和させようとしていると結論づけた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　岸本　千秋　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	石　井　正　彦
	副 査	大阪大学　教授	渋　谷　勝　己
	副 査	大阪大学　准教授	三　宅　知　宏

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　ウェブログの計量的文体研究

学位申請者　岸本　千秋

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　石井　正彦

副査　大阪大学教授　　渋谷　勝己

副査　大阪大学准教授　　三宅　知宏

【論文内容の要旨】

本論文は，ウェブログ（以下，ブログ）の文体を，計量文体論の観点・手法によって明らかにしようとするものである。論文の本体は全７章から成り，その分量はＡ４判 137 頁，400 字詰め原稿用紙換算約 410 枚である。以下，本論文の構成に従ってその要旨を記す。

第１章では，方法論となる「計量文体論」についてその研究史・方法論を確認した上で，研究対象とするブログの社会的な性格と，これまでのブログ研究の到達点・課題とを検討し，ブログが，一般の一個人が情報の発信者となる新しいコミュニケーション手段として発達・定着し，個人から発信される言語情報量が爆発的に増えるという社会現象の一端を担っていること，ブログの文体を明らかにする上では，特に「ウェブ記号」（カッコ付き文字・フェイスマーク・絵記号）と文との関係に注目する必要があることを述べる。

第２章では，本論文で用いる調査資料についてその概要を説明し，データを収集したブログサイトの登録者数，年代，データの収集方法などの詳細を示す。

第３章では，ウェブ記号について概観し，特に「カッコ付き文字」について分類・整理を行い，その特徴を明確にする。「カッコ付き文字」には機能面・形式面・表現スタイル面からの分類が可能であることを示し，これらにもとづいて，ブログの「カッコ付き文字」がケータイメールなど他のメディアで使用される場合とは異なる側面をもつことを明らかにする。

第４章では，ブログの文章に見られる「読み手意識表現」に注目し，「公開意識」のアンケート調査で有効回答とした書き手のブログから大分類４項目・小分類 13 項目の「読み手意識表現」を抽出して，特に「丁寧体」「終助詞（ヨ・ネ）」「ウェブ記号」などの使用頻度が大きいこと，また，公開に積極的な書き手ほどこれらの「読み手意識表現」を多用する傾向を見出すことで，書き手の意識と表現とに関連性が認められることを述べる。

第５章では，ブログの文章の量的構造を品詞・語種・文長・字種の各面において調査し，一般的な書きことばとしての新聞投書と比較することにより，各調査結果のすべてにおいて，ブログの文体が書きことばよりも話しことばに近い文体であることを明らかにする。

第６章では，ブログの文章を構成する文とウェブ記号との関係について，文長（文字数）および品詞構成比を指標とする調査を行い，ウェブ記号が付加された文の長さは，そうでない文よりも平均しておよそ４字分短いこ

と，また，感動詞・形容動詞・副詞の類が多く，接続詞・名詞・連体詞の類が少ないことを，ｔ検定，ロジット変換などの統計手法により見出して，書き手の感情を勢いよく述べるための文にはウェブ記号が付加されやすいことを明らかにする。

第７章では，同じく，文とウェブ記号との関係として，文末の終助詞とウェブ記号，および，言いさし文末の接続助詞とウェブ記号との共起関係について調査し，前者については，終助詞「ナ」が共起しやすく，「カ」は共起しにくいこと，後者については，「ケド」と「ノデ」が共起しやすいことを，対数尤度比検定などにより明らかにして，ウェブ記号が文の叙述内容に「感動」の気持ちを付加したり，叙述内容を和らげたりする機能を担っていることを示す。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は，インターネット時代の新たなコミュニケーション手段であるブログが，一般の個人による日記的情報の公開的発信という独自のコミュニケーション行動をうみだし，そのもとで従来の書きことばとも話しことばとも異なる新たな「ことば」が創造されつつあるとの認識から，その文体を，科学的文体論を標榜する計量文体論の観点・方法によって解明しようとしたものである。計量文体論の新たな研究対象を開拓し，大量のデータと最新の統計手法に基づく実証的な調査研究を実践している点で，本論文は一定の価値を有するが，より本質的な評価に値するものとして，以下の諸点をあげることができる。

第一に，ブログの文章の量的構造の調査を行い，ブログの文体が書きことばよりも話しことばに近いこと，特に，いわゆる「樺島の法則」において空白となっていた「小説地の文」と「談話語」との中間に位置づけられるものであることを具体的に示した点である。これは，樺島の法則が名詞と他品詞との関係として示す回帰式の妥当性を補強する重要な発見である。

第二に，文章の量的構造を静的に記述するだけでなく，書き手の「読み手を意識した表現」と「公開意識」との関係を明らかにして，個人による日記的情報の公開的発信というブログ独自のコミュニケーション・スタイルの本質に迫っている点である。

第三に，ブログの文体を構成する重要な要素として特にウェブ記号に注目し，従来のケータイメール研究などでの静的な分類にとどまらず，それらが付加される文と付加されない文との違いを統計的に見出して，ウェブ記号の使用が文の叙述内容やモダリティ表現とかかわっていることを具体的に明らかにした点である。

これらにより，本論文は，ブログという新しいメディアの文体を，一定の説得力をもってとりだすことに成功していると言える。ただし，そこには，とりわけ本論文が眼目とするウェブ記号と文との関係を中心に，いくつかの克服すべき課題も残されている。ウェブ記号がかかわるとされる「文の内容（叙述内容）」の実体が，文長や品詞構成比といった外形上の指標によるものにとどまって，その意味・機能にかかわる質的な側面においてとらえられていないこと，文末のモダリティ表現（終助詞・言いさし文末の接続助詞）の意味・機能について，最新の知見も含めた研究成果の蓄積を十分に踏まえることができていないこと，ウェブ記号を単一の文体素としてまとめて扱ったために，どのような文にどのようなウェブ記号を付加するか・しないかが，書き手の意識を含めて，具体的に調査されていないこと，などがそれである。これらの課題は，文とウェブ記号との関係の本質的な把握のためには，本論文の結論の先になお検討の余地が残されていることを示している。

とはいえ，本論文が，ブログの計量文体論として，この分野に重要な新知見を加えたことは明らかであり，上の課題も今後の研究の方向性を示すものではあっても，その価値を損なうものではない。よって，本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。